

山口県の地質物語 - 6 : 山口県の地質概要図

山口県全体の地質を概観するためには図1が便利である。これは県内の多様な地層や岩石を14種類の地質単元に大きくまとめて編図されている。地質単元の名称は、直感的にわかるように工夫され、形成年代、でき方、岩石のグループ名を組み合わせ、つくりられている。たとえば“古生代付加型堆積岩”とは、古生代に付加作用によって形成された堆積岩を意味する。“新生代火山岩”のように、「でき方」を省略したものもある。

各地質単元の分布面積比は、中生代火山岩が最も大きく23.4%を占め、中生代深成岩の21.6%が次ぎに続き、両者で山口県の50%近くを占めている。中生代高压型変成岩、中生代陸棚型堆積岩および新生代第四紀層はそれぞれ10%強であるが、その他は数%と小さく、とくに長門構造帯構成岩石や新生代深成岩は1%にも達していない。

地体構造の基本は、古期の地質单元—すなわち、長門構造帯構成岩石、古生代石灰岩を含む古生代付加型堆積岩、中生代高压型変成岩、中生代付加型堆積岩とその変成部の中生代低压型変成岩—が、この順で北西から南東に向かって、北東—南西方向にのびる帯状配列をなす。これらの古期地質单元を不整合におおって、中生代陸棚型堆積岩が県の北西部に広く露出している。これらすべてを貫いて、中生代深成岩と中生代半深成岩が各所に広く貫入し、さらにこれらを不整合におおって、中生代火山岩が県北部を中心に広い分布を示す。新生代深成岩、新生代火山岩、新・古第三紀堆積岩および新生代第四紀層は、県内の各所に小規模な分布をなしている。

紙面の都合で、簡略化した。詳しくは、『西村ほか、2012、山口県地質図 第3版 (15万分の1) および同説明書. 山口地学会, 167p.』を参照されたい。(文責：西村祐二郎)

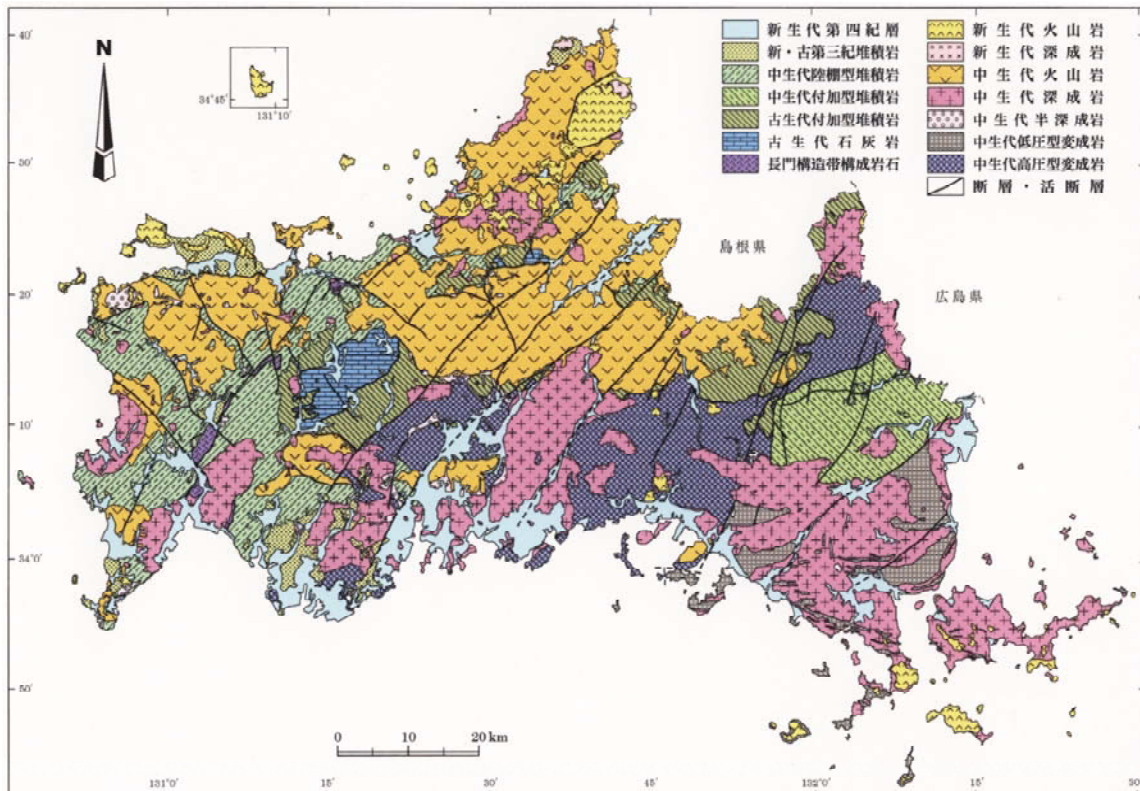


図1 山口県の地質概要図 (西村ほか, 2012)